

第三の千年へ向かうロシアにおける 法華経と仏教哲学の未来

V・I・ルドイ

E・P・オストロフスカヤ

斎藤ベントツエク子 訳

第三の千年期を控えた今日、東洋文明と西洋文明の新しい相関関係が指摘される。近年十年間にわたって、従来からのキリスト教的西側とイスラム的東洋というはっきりした境界線を洗い流し、人類が一体化する共同体を建設しようとの傾向が際だって顕著だった。現在、グローバルな発展のストラテジーを研究している社会学者の多くは、二十一世紀には人類文明の中心がアジア環太平洋地域に移動するであろうという点で見解を同じくしている。このプロセスは、キリスト教、イスラム教の種々の流れに源を発する諸文化とこの地域に特徴的な仏

教文化とのダイナミックな相互作用を媒介していくと考えられている。

歴史的に東洋と西洋の中間に位置してきたロシアは、宗教的にも、従って文化的にも、自らのあるべきシベリアイズド・ステータスを模索する現代世界の一種のモデルと言える。ロシアの諸民族は、自国の二十一世紀へ向けての将来を、先進国に習った経済改革と技術革新の側面だけで捉えているわけではない。むしろ、伝統的精神的価値を如何に現代に甦らせることが出来るかという視点から試行錯誤しているのではないか。

太平洋への広範な出口を持ち、地政学上、さらには文化・文明論的ポテンシャルの面でもアジア環太平洋地域への属性を有するロシアは、自らの将来にとってより建設的方向を選択することを迫られている。すなわち、西欧プロテスタント的自由主義、個人主義の理想に追随し、ロシアの民族社会、共同体の核となっている宗教的文化的多様性を最終的に破壊してしまうのか、それとも、伝統的に仏教の教えの中に存在する個と個のつながりを重視する考え方が精神的バネとなり、それが急速な経済発展の前提を生み出したような国、例えば日本のような経験を創造的に理解し消化する方向を目指すべきか、という選択肢である。

この観点から、仏教が人類の精神文化の発展に与えた貢献とはどのようなものを研究することが重要となってくる。その際、学術的には、仏教経典の本質を理解するために最も重要とされる法華経（サンスクリット：サツダルマ・プンタリーカ・ストラ）の研究が最大の課題となる。紀元後一―二世紀にインドで有名になったこの経典は、全ての仏教国で、殊に極東アジアの国々において

絶大な権威と影響力を持っている。それまでの五百年間、様々な宗派、流れを形成しつつ受け継がれてきた仏教の宗教的理念が最終的な完成を見るのは法華経においてである。

ロシアにとって、仏教は異国の、見知らぬ、エキゾチックな宗教ではない。大陸に大きく横たわるロシアの領土には、仏教が幾世紀にもわたって主要な宗教として存在している地域が含まれている。ロシアの極東の国境線は、仏教文化の世界との直接的接触をわが国に促してきた。このような事実が、上座（小乗）仏教と大乘仏教の間にある矛盾を昇華した高度なジンテーゼ（綜合）としての法華経の研究の発展を強く後押しするファクターである。

周知の通り、上座仏教は出家主義を主流としている。上座仏教徒にとって、宇宙は苦しみ、サンサーラ（輪廻）の世界であり、そこで人間を待ち受けているのは「失望」のみである。この世界を改善することは、本質的に不可能とされ、変革すべきは自己自身のみであり、その唯一の目的は、二度と再びサンサーラ（この世界）

に生まれないことだった。そして、その目的を成就するための方法は、上座仏教にあつては唯一、出家僧となることとされた。仏教の開祖、釈迦仏については、上座仏教は、歴史上の人物という限定的捉え方をする。つまり、釈迦仏という存在は、かつてシッタールタ王子だった人が努力の末に成仏して、真実の教えを説いた、という理解である。そして、この世を隠遁した僧侶のみが仏の弟子として完全な知識を会得でき、それによって苦しみに打ち勝つことが出来る、とする。在家仏教徒を差別するこの様な解釈は、この流れが「小乗」と称される由縁でもある。

マハーヤーナ、即ち「大乘」の教えは、誰よりもまず在家の人々に向けられた教えである。「大乘」は、在家の人々にも、出家を必要としない直接的解脱の道を説く。それは、菩薩の理想を実現する、即ち、私利私欲に捕らわれない在家の精神的指導者として、衆生への偉大な慈悲に貫かれた行動、衆生に幸福をもたらし、苦しみを取り除く為の行動を通して解脱をするという教えである。

内実を示すことに向けられており、仏道を「エーカヤーナ」、「つまり「一乗」と説いている。法華経に従えば、仏の教えは、一切衆生を苦しみから解放するためのものである。仏とは、ある時点で世界に真実の教えを垂れた歴史上の具体的人物を意味しない。その本性は一切衆生に備わっており、人々は必ずや次第にその仏性を表すことが出来るゆえに、仏は永遠に存在している、と説いている。法華経によれば、生命ある存在は如何なるものも差別なく、この至福の可能性を約束されている。釈尊に敵対したいとこのデーヴァダッタも、中国語訳で竜王の娘とされる女性も、皆仏になる、いたるところに出現する無数の菩薩たちも成仏が約束されている。一人一人の間は菩薩と呼ばれるにふさわしい。なぜなら法華経に説かれた真の教えを聴聞した者は、必ずや菩薩の行いをしていくからだ。法華経の中では、衆生は「仏の子」と呼ばれ、これ一点をもつてしても、エーカヤーナ（一乗）の教えのレベルにいたって、サンサーラ（苦しみの世界と涅槃（苦しみの克服）とが対置された関係では無くなる。自身と他人の中に仏性を認識するとき、人間は、こ

法華経は、大乘仏教の経典として有名になった。法華経の写本は、サンスクリットで書かれたネパール本、ギルギット（カシミール）本、そして中央アジア本、更に、それぞれからの中国語訳などが現在まで伝えられているが、そのどれにも大乘教らしい特徴が認められる。法華経は、伝統的にはいわゆるヴァイプリヤ経典（広げられた、幅の広い経典、方広教典）に数えられる作品に分類されている。これは、その文中に、より時代の古い、ピージャ（種子）と呼ばれるそれ自体で完結した内容を持つ、極短い経が織り込まれているものを指す。まさにこれら、種子の経が、大乘教の初期の教えがどのようなものであつたかを知り、如何なる宗教的理念と精神的意味あいがある法華経の中にとけ込んで融合しているかを理解する手がかりとなる。この問題は、既に数十年前から学問上極めて重大な課題とされてきたものの、現在に至るまで統一された見解が見出されていない。

法華経は大乘経典と見なされているが、その内容において、明らかに大乘教を凌駕している。なぜなら、法華経の崇高なる理念は、仏教の様々な教えに貫かれている。世からの逃避ではなく、未来の仏である他の人々と共に、一緒に、現実の変革に挑戦する事を目指すようになる。

偉大な仏教思想の記念碑である法華経は、その中に潜在的に脈打ち、存在しているモノテイズムの（一神教的）モチーフの故に、幾世代にもわたり多くの研究者たちを引きつけてきた。一八八四年、H・ケルンは、法華経をサンスクリットのオリジナルから翻訳し、出版した。当時においては、彼の翻訳は貴重な貢献であつた。しかし、それから百年を経た今日の我々の仏教の教義に関する知識は、かなり深まり、現在ケルンの翻訳は既に価値を失ってしまった。一九三〇年、W・E・スーシルが、中国語からの法華経の要訳を試みた。これは、無謀とも言える挑戦だったが、それによって、サンスクリットから中国語への翻訳の際に、オリジナルの多くの重要な部分が誤訳されていたことが判明し、その意味に限って言えば試みた価値はあつたといえる。現在、最も信頼できる翻訳としては、一九七六年にレオン・ハーヴィッツが鳩摩羅什訳の中国語版から翻訳し、仏教の基本概念につい

て意味論的研究を付随させたものがある。

この様な背景から、残念ながら、現在はサンスクリットからの法華経のロシア語訳は存在していないことになる。では何故、我々にとって、法華経のサンスクリット・ヴァージョンが大切なのだろうか？ 仏教―それは、インド・ヨーロッパ民族・文化共同体を土壌に生み出した初めての世界宗教である。キリスト教とイスラム教の二つは、ユダヤを起源とした中近東の宗教である。法華経に見るエーカヤーナ（一乗）は仏教的モノテイズムであり、あらゆる角度から見て学問的研究価値を有している。なぜなら、このモノテイズムの起源は、中近東の影響に縛られていない宗教的思想の発展過程とその傾向性を追っていくことを可能にするものだからだ。この法華経のモノテイズムは、インドに発して、アジア環太平洋地域の一部である極東アジアで広く流布した。

サンスクリットの法華経の研究、及びロシア語への翻訳は、エーカヤーナ（一乗）の起源の研究を抜いては不可能である。二十世紀初頭に活躍し、日本で教養ある仏僧に師事して仏教の知識を蓄えたロシアの学者O・O・

出来るだろう。

中国で教えを広めたパラマールタ（真諦）（六世紀）によれば、インドにおいては法華経の解説書は五十以上存在したが、これらの解説の内、中国語に翻訳されたのはわずかヴァスバンドウの一書だけである（このサンスクリットのオリジナルは残っていない）。この事実は、極東において如何にヴァスバンドウの人格と哲学が深く尊敬されてきたかを物語っている。

ロシアにおいて法華経のモノテイズムが正しく理解されるためには、教養のある読者層に幅広くエーカヤーナ（一仏乗）の哲学的根拠を紹介する必要がある。それは、ロシアの人文科学が、西欧のキリスト教諸国から十八世紀に借用した学問体系を原型として形成されてきているからだ。仏教をふくめた哲学の研究をヨーロッパ中心主義で進めることについては、学術的レベルでは厳しい批判がなされて久しいものの、実際問題、大学教育の現場はほとんど何も変わっていない。仏教哲学を必修科目に定めているロシアの大学は今なお一つもない。人類文明の中心がアジア環太平洋地域へ移動すると予想される二

ローセンベルグは、仏教の文献、経典を学び、それらを正確に理解するためには、仏教哲学的諸論文を前もって学問的に研究しておかなくてはならない、と結論している。エーカヤーナ（一乗）の研究に関しては、内容的に最も充実している哲学論文は、ヴァスバンドウ（世親）のアビダルマコーシャ（俱舍論）が挙げられる。アビダルマコーシャは、それよりかなり以前の文献、アビダルマ・マハーヴィバーシャ・シャーストラ（大毘婆沙論）において初めて形成されたブッダヤーナ（仏乗）の理念を、充実した哲学体系の形で紹介している。学者たちは、幾度となく法華経の理念とアビダルマ・マハーヴィバーシャ・シャーストラ（大毘婆沙論）との関係に注目して来ているが、未だにつつこんだ研究は成されていない。

アビダルマコーシャをサンスクリットの原文と中国語訳の両方で研究することは、一仏乗の教えの哲学的基礎を認識する可能性を開くものである。それによって、我々は、仏教の精神文化の最高峰である法華経に示された包括的宗教理念をより完全に理解し、評価することが

十一世紀を控え、哲学の分野に於けるこの様な嘆くべき状況は是非変革していく必要がある。F・I・シチエルバツキー、S・F・オルデンブルグ、B・Y・ヴラジミルツォフ、O・O・ローセンベルグ、E・E・オーバミューラー等のアカデミー会員諸氏がロシアの学問に残した伝統を継承するため、我々は、常にわが国の仏教研究の中心であり続けたここサンクトペテルブルクにおいて、ヴァスバンドウのアビダルマコーシャ（俱舍論）を資料としてブッダヤーナ（仏乗）の哲学的根源に関する研究を展開してきた。我々は、この作業を、ロシア人に法華経のモノテイズムを紹介するために必要な準備段階であると考えている。

サンクトペテルブルクに東洋哲学研究所ロシア・センターが開設されたことにより、近い将来、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵の豊富な資料を使つての法華経の共同研究を行えると期待したい。又、この東洋哲学研究所ロシア・センターが、仏教、キリスト教、イスラム教という世界宗教が長い歴史をかけて育んできた偉大な精神的価値が相互に交流す

る中心地となることを期待したい。

(V・I・ルドイ、ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員)

(E・P・オストロフスカヤ、同研究員)

(訳・さいとうペンツ えくこ)

(本稿は一九九七年五月三十、三十一日に行われた当研究所
シア・センター開所記念シンポジウムでの講演原稿です)